

[寄稿]

生と死に立ち会うこと 一切実な体験こそ人を育てる一

札幌学院大学人文学部人間科学科 伊藤 則博

1 はじめに

近年我が国で進行した都市化、情報化、家族の縮小、少子化、生活の合理化などの大きな社会変化の流れは、青少年の心身の成長や社会的発達にとってこの上ない準備条件になっていた様々な自然現象や動植物との直接接触、人々との出会いの経験を大幅に限定することになり、その結果青少年のオタク化・不登校・引きこもりなどの非社会的現象やいじめ・暴力・非行等の各種行動化現象が引き起こされ、また親子・保育者・教師などの特定の大人とのタテ関係の肥大が起きていて、そこから大人から子どもへの管理・支配・干渉・保護などの過剰な対応が生みだされているように見える。

人は子ども時代に、多様な自然事象や人々に直接出会って喜怒哀楽に満ちた濃厚な相互作用を行い、自発的で自由な行動を通じて成功と失敗を含めた幅広体験を重ね、それらの経験を長く心に留め置くことが、彼らの精神生活を豊かにし、明日への希望を醸成し、また彼らが社会的役割を担いながら自立して生きてゆくためにこの上なく重要なことであるように思われる。しかし、現代日本に生きる子ども達にはそれらの豊かな体験が十分保障されなくなってきており、そのためにしっかりした対象認識・自己意識が形成できず、安定した世界観・人間観ももてないでいるようにみえる。

そこで私は、近年の我が国の子ども達に失われつつある体験の中でも、とりわけ重要ではないかと考えている「生と死に立ち会うこと」が持つ意味について、考えてみたい。

2 「生まれ出ずるもの」との出会い

私は、片田舎の農家の息子として家庭分娩で、未熟児で生まれた。後に母からよく聞かされたこ

とだが、産婆さんと家族、近所の手伝いのおばさん達皆の協力により難産を乗り越えての誕生であつたらしい。自分のこの出世時の事は記憶にないが、私の7歳と5歳下の弟妹が生まれた時の張り詰めた我が家の雰囲気、台所で一心にお湯を沸かして居る父親の姿や家中を忙しく動き回る人々の姿、オギャーと産声が聞こえた直後のその場を共有した人々の何とも言えない解放感と歓喜の情景は、今でも鮮明に思い出すことができる。

竹内徹(1989)は、現在では少なくなった家庭での分娩の様子をつぶさに観察して、母子相互作用の成立過程や分娩介助者との関係などその場に立ち会った人々の様子をまとめているが、その中に次のような事実が含まれていることに私は注目している。

- ① 著しい気分の高揚が、立ち会った人々の強い興奮と結びつくことが観察される。
- ② 分娩に立ち会った人々は、誰でも生まれた子どもを長時間にわたって注視しつづける。
- ③ 母親はすぐ身繕いをしてもらい、介助者たちと喜びを分かち合う。

このように、一昔前まではわが国でも一般的だった家庭における自然状況での分娩は、家族全員と地域の人々を総動員した共同の一大事業であつたらしい。私が子どもの頃、近所で逢うおばさん達に「私は、あなたが生まれる時手伝ったんだよ」とか、「生まれた時あなたは小さくて心配したけど、丈夫に育ってよかったね」などと声をかけられることが多く、私はそれが嫌で逃げ回っていたという記憶がある。自分が全く知らない自分の誕生時のことを家族以外に知っている人がいて、いろいろ言われるというのは「何とも妙な気持ちになる」もので、私はそのためにおばさん達を避けていたのだと思う。

近所のおばさんたちの私に対する声かけは、学

校の運動会や学芸会の時の熱烈な応援や私が進学のため郷里を離れて時々田舎に帰省した時も、さらに私が結婚して家族で田舎へ帰った時までも続いたのだが、やがて私は、このことがどれだけ重要な意味を持ったものであるかということに気づいた。

私の出生に立ち会った近所のおばさんたちは、その場で人の誕生という特別な体験を共有することによって、他人でありながら私との間に特別な心理的關係を築いてくれていたのである。だから、その後もずっと私の育ちを見守り、心理的に支えてくれていて、私が運動会で賞に入ったり、受験に合格した時には、自分の身内のことのように喜んでくれたと思われる。そこには、明らかに地域の心理的共同体と言えるものが存在していたわけで、私はその中で守られ支えられて育ってきたわけであるが、そういうことが私に自分の生い立ちや諸能力をはじめとした自己意識の醸成、自分と家族・近隣関係など人間関係のあり方や人間観、さらには「ふるさと意識」をつくることまでを促してくれたのだと思う。

今はもう、私を取り上げてくれた産婆さんも、私の出生を介助し喜んでくれたおばさんたちもこの世の人ではなくなってしまったが、昔と変わらぬたたずまいの郷里の田舎の道を歩いていると、私の心に懐かしい独特の感慨とともに強い安心感が蘇ってくるのである。

3 生に出会えなくなった時代

しかし、人や動物の生まれて来る姿に立ち会うという機会は、現代日本に生きる人々や子ども達に著しく限定されてきているように感じられる。現代では、人が生まれる事は、家庭や地域から離れた「安全な」施設で、「専門家集団」の手によって果たされ、家族や地域の人々が参加し共同作業として行うものではなくなってしまった。そのため、赤ちゃんは人知れず生まれ、介助の必要がない状態になってから家庭や地域に戻ってくるが、その時の子どもは彼の出生時に立ち合いがなかったが故に、地域の人々にとっては、場合によっては家族にとってさえ、「共有の存在」ではなくなっている可能性がある。

施設分娩の拡大は、日本の近年の高度経済成長とともに進行したのだが、これが家族や地域の濃厚な人間関係の解体の要因の1つとなった可能性を否定できない。この行き過ぎを補うかのように、最近では周産期医療の側でも夫や親族の「立ち会い分娩」や「自宅での自然分娩」を勧めるところが出てきているが、「生に立ち会うこと」の意義が再認識され始めたということであろうか。

ところで、私が生まれた家が稲作と畑作を兼ねた農業と牛と羊を中心とした酪農業を兼業で営んでいたため、私は幼い頃から動植物との豊富な接触経験をもつことができ、その中から生物が生きるとはどういうことかを、また我々人間と動植物との間にある「持ちつ、持たれつ」、「生かし、生かされる」相互依存関係を学んだ。そこには、米や野菜を種の段階から大切に育て上げて収穫するまでの様々な生育過程と、そこで加えなければならない人間の細かな配慮があった。例えば、稲の種（モミ）というものは秋に収穫した段階から大切に保存しておき、芽を出させるためには温床で温度・湿度・土壌の管理を行い、芽が出た後には十分な温度を整えなければ、露地の田に植える苗までに育たない。それだけに、モミが芽を出して土の中から顔を出した時や田植えをしてしっかりと根づいた時の家族全員の喜びは、他に変え難いものであった。これは人のこの誕生と育ちを喜ぶ心と同じである。

動物たちでは、犬猫を初めとして、牛、馬、豚、鶏等の家畜たちがたくさんいたし、近所の川にはヤマメやカジカ、鮭などの魚たち、近所の森には兎や鹿などの動物たち、タカや雉・鳩などの鳥たちが沢山いて、私は彼らと日常的に親しみ彼らと一緒に育ったようなものだと思っている。その中では、家畜の赤ちゃんの出産に立ち会い、鳥の雛の孵化や成長を目撃して感動したなどの体験もしたが、動物たちの生存競争の厳しさに触れて立ちつくしたことが幾度もあった。私は、そうした経験から「生まれて来ることの不思議さ、素晴らしさ」とともに「この世の中には、人の力や思いではどうしようもないことがある」という現実を学んだ。

このような動植物との出会いの体験は、1世代

以上前の日本であれば多くの子どもたちが大なり小なり日常的にしていたものだったが、都市化・文明化・分業化・人工化・管理化・情報化などが進行した現代では、それが非常に難しくなっている状況である。

4 子どもたちの姿が地域から消えてゆく

「生一々生きていくこと」を我々に最も実感させてくれるのは、子どもたちが自由に生き生きと活動する姿に触れたときである。ところが、いま我が国では「少子化」が問題視されて、高齢化問題とともに国が取り組まなければならない緊急の課題となっている。少子化は、それだけできょうだい関係や親子関係のあり方に様々な影響を与えるが、これが核家族化、合理化、電化、情報化などと合わさると、子どもたちを屋内にとどめ、親子関係のみを肥大させるとともに、子どもたちの屋外での遊び活動や交友体験を限定することになる。子どもからしてみれば、成長のための重要な諸経験の大幅な制限である。

最近では、地域社会からも子どもたちの姿が消えつつあるように思う。登・下校時間帯の学校付近の道路の上では、沢山の小・中学校生を目にすることがあるのだが、放課後や休日に私の地域では子どもたちの姿をほとんど見ることはない。ましてや、「群れで動いている」子どもたちの集団にお目にかかることは全くなくなった。これは、私の住む地域が高齢者の世帯が多い地域だからだろうか。たまに我が家や近所の家に孫たちが遊びにきて、子どもたちの声が聞こえると、地域が急に華やいだように感じるのは私だけだろうか。

ところで、遊び盛りの子どもたちにとって木々が生い茂り、昆虫や小動物が生息する大学の広いキャンパスはどこも格好の遊び場であり、ひと昔前であれば学校の放課後や休日にになると子どもたちの賑やかな声がキャンパスのあちこちから聞こえていた。中にはいたずらっ子もいて、窓ガラスを割ったり、壁に落書きしたり、木の枝を折ったり、校舎内をうろついたりして、我々から怒鳴られた子どもたちもいた。それが今では、キャンパス内に子どもたちの姿もないし、声もまったく聞こえない。非常に寂しい思いがする。

このように、身近に自分と異なる年齢段階の人々がいなくなるということは、人間関係を非常に単調なものにし、ついには異年齢の人達への理解や対応方法が分からなくなるという意味で、つまり人間関係を心理的に分断する可能性があるという意味で由々しきことである。私も、今では大人だけの静かな日常生活に慣れてしまった身なので、電車やバス中で幼い子ども連れの際やかな親子を見て「うるさい!」「親は何をしているんだ!」と眉をひそめるかもしれないのだ。

人間の子どもは、幼い段階からきょうだい関係を含めて親子関係以外の人間関係を次々と経験しながら、次第にその関係の輪を広げてゆき、青年に至る頃にはどれだけの人間関係を取り結んでいるかがその人の社会適応性や精神的健康の指標になるとさえ言われている。子どもは幼い段階から同年齢・異年齢の他者と出会い、彼らと仲良くして調和感・充足感を味わい、対立し勝ったり負けたりして成功感や失敗感、優越感や挫折感を経験し、やがては譲歩・和解の道を見つけ出すようになる。また、年長者には服従や依存することで集団的適応をする術などを学び、年少者に対してはいたわることを覚える。

近年増加してきた不登校児童生徒、引きこもり青年、小児うつ病などの問題の背景には、現代の子どもたちの人間関係を中心とした体験不足があると思われる、同様に現在の我が国の緊急課題とされる「児童虐待」や「不適切な養育」の急増問題の背景にも、虐待者の育ちの問題すなわち子ども・青年時代の親子関係や同年齢・異年齢との交友関係のあり方の問題が存在していることが指摘されている。

5 病と死に立ち会うこと

Huizinga (1919) の「中世の秋」を読むと、中世では人の病氣や死が誰にでも見えていたことが良く分かる。「病人が町を歩き回っていたし、道端にうずくまっている者もあった。誰かが死ぬと教会の鐘が鳴り響き、町全体がその埋葬に加わった。死者は、教会の周囲に掘った墓場に葬られたが、その墓は町の中心部にあった」と書かれている。

私の子ども時代の田舎では、ヒトや動物の誕生に立ち会う機会とともに、ヒトや動物たちが病むことや死にゆくことに会うことが沢山あったように思う。手塩にかけて育てた家畜が、病気や事故で弱って死んでゆく姿に接し、時には「これ以上生かしておいては苦しむばかりだ」と自分たちで始末をつけなければならない場合もあり、このようなときのことは本当に辛く悲しかった体験として今でも心に焼きついている。幼い頃から何かと面倒をみて可愛がってくれた祖父母や近所の老人たちが、老いて病に伏し、弱ってゆく姿に子ども心を痛め、毎日仏壇に向かって拝んだことや、一緒に遊んだ友人の突然の事故死に何日も呻吟したこともあった。

私の父はくも膜下出血で、母は白血病の進行によって亡くなったが、死にゆく父と母の姿は「人が生きるとはどういうことか？」ということをしつかりと語りかけてくれた機会であり、父母が身をもって私たちに示した最後の教えであったのではないかと感じられるのである。私は、この父母が弱って行く姿や死に向う姿を、孫である私の2人の子どもたちに体験させる必要があると考え、しつかり立ち合わせた。その時2人はまだ小学生と中学生で、弱って死に向かう祖父母の前で何度も涙していたが、愛する人を失うという切実な現実を体験させることができ良かったと思っている。

6 病と死が遠くなる

ところが、現代の病人は生まれ育ち働いた家庭や地域社会から外され、病院や施設で生活するようになった。同様に、障害者も老人もまた地域や家庭から外されて、遠い場所に集められるようになっている。誰のためにそういうシステムができてきたのかということ突き詰めて考えてみると、それは病人や障害者・老人のためというより、家族や医療・福祉従事者の便宜のためである可能性が大きいのではないと思われる。一度成立したシステムというものは、やがていろいろな機能を持つようになる。その機能の1つに、患者や入所者の家族や関係者に辛く切ない経験をさせたくないということがあるのだろう。そこで、現在の

病院や老人ホームを訪れる見舞客には、病気の状態や老いることの哀しさや切なさ、そして死についてはほとんど気づかれなくなっているのである。そこには笑顔や笑い声があり、苦しみや悲しみはほとんど見受けられない。何故なら、重症患者やターミナル期の患者は特別な病棟や病室に移され、多かれ少なかれひっそりと病むことになっているからである。死に向かう苦しみや死そのものは、決して見られてはならないもののように、人々から遠ざけられるようになってきた。今では、重症の人や死にゆく患者は他人ばかりか家族からさえ離され、ひっそりと病み、ひっそりと死んでゆく。残された人々への「生と死の意味を伝える」ための無言の教えを残せずに…。

そして、沢山の菊の花で飾られた葬儀セレモニーとBGMの流れる豪華な火葬場を経て、郊外の、緑のドームに包まれた墓に納められるという、何とも効率の良いシステムが出来上がっているのだ。

7 生・病・死を遠ざけることで失うもの

このようなことによって、今沢山のことが失われようとしている。心理学的には、われわれの日常生活から生や病・死を覆い隠してしまうことは、極めて危険なことに思われる。そのことによって、人々の体験の幅が狭まるだけでなく、生きるということの実感や深い認識が薄れ、生きることの本当の喜びや悲しみ、幸せや辛さなどを体験できなくさせる可能性があるからである。

我々が「生きとし生けるもの」の誕生に感動し、その成長を喜び、生命の終わりや朽ち果てて行く姿に涙する、そのための機会が限定されることが、我々の動植物への感覚や意識の形成を阻害し、やがては動植物の一部である人間、さらには自分自身への感覚や認識の成立を危うくするようなことになる可能性があり、このことが発達途上の子どもたちに及んだ場合、心身の発達の基本問題となるだろう。

さらに、我々の価値認識や情操過程というものは両極性をもっていて、片方の経験だけでは両方の感覚が成立しないといわれている。例えば、なにがしかの悪を経験しないものは善の意味も理解

できないし、悲しみや苦しみを経験しないものは真の喜びや幸せを味わうことができないのである。命の大切さや思いやりの心情形成は、幼い頃からの生・死・病に出会うという「感動と慟哭」のような「切実な経験」の蓄積によって可能になるのではないと思われるので、子どもたちの切実な経験が持つ発達の意義は大きいものなのである。

近年の日本人は、衣食住の段階から生活の仕方が大きく変わってきた。現在では断熱材が施され、冷暖房設備が完備された快適な住宅に住み、季節ごとに異なる沢山の衣類や装備品を保有し、食べたいものはいつでも家庭の冷蔵庫か近所のコンビニに行けば手に入る。つまり、我々は現在身体感覚的段階から切実な経験をほとんどせずに生活出来るようになってきているのである。このような「ぬるま湯生活」が発達途上の青少年に及んだ結果、「日本の相撲会から日本人を減らし、かつての相撲大国北海道から幕内力士を消滅させ、また子どもの体力測定で北海道を最下位に転落させてしまったのではないか」という人がいるが、私はこの主張に妙に納得させられてしまうのである。

この我が国の「ぬるま湯環境」の問題は、人々の体験過程についてまで及んできているように思われる。最近では「トラウマ＝心的外傷」なる専門用語が人口に膾炙してきて、次第に人の辛く哀しい経験があったかもその人の生活や精神を破壊するかのように考えられはじめ、楽しく愉快的な経験ばかりが求められる世情になっているが、これは全くの間違いである。昔から「苦労は買ってでもしなさい」といわれるように、古今東西「切実な経験こそ、人間を育てる」ということは真実なのだと思う。

ところで、死や病を忌むべき事として遠ざける事が持つ危険性と同様に、我々の日常生活から老人や障害者を隔離するという事も非常に危険なことである。そうすることは、人の内面に深く潜む差別・排除・抑圧の思想の合法的実現だからである。さらにいえば、現代の文明人が次第に完全性を求めてきた無駄省きの思想と技術のおかげで、いつの間にか我々は「衰退する」「朽ち果てる」という自然界の一方の真実から目を覆い、接触を

拒否しようとしていることは、誠に大きな問題ではないか。このようなことが続けば、いつでも我々の存在の滅びやすさ（それは人間の第一の真実である）は隠された、それ故にかえってもっと危険な脅威になっていくだろう…。

以上は、オランダの精神科医で哲学者でもあるVan den Berg (1966)の言葉を借用して私なりに解釈し、私見を交えて解説したのであるが、長年ターミナル・ケアに従事してきた柏木哲夫(1995)も「死が自然に学べず、意識して学ばねばならなくなった」現代世相について問題提起し、「死を学ぶ」という本を著している。私には、氏がこの本の中で「死が自然に体験できなくなったところに、現代の日本人と日本の子どもたちの悲劇がある」と主張しているようにみえる。

8 おわりに

人間の真実の姿である「生まれること」や「成長すること」、そして「朽ち果てること」あるいは「死にゆくこと」を病院や学校、施設に任せてしまったり、人々の目から遠ざけてしまうことは、家族や地域社会の人間関係にゆがみをもたらし、「人が人生を全うすることや、生き切るとはどういうことか」について、我々が「しっかり考えること」や「人と正面から向きあうこと」、「人との絆を深めること」を難しくする可能性がある。

「文明の発展には、必ず負の遺産が伴っている」といった人がいるが、「救命すること」を第一の目標に努力を続け、発展してきたわが国の高度の医療システムが、結果的に人間を、また人間の心を疎外し始めている面があることに我々はまず気づくべきだろう。それは子どもたちのために成立し発展してきた学校教育や障害者や老人たちのためにつくられた社会福祉のシステムが、今や子どもたちや障害者・老人を囲い込み、管理し、拘束するようになってきているのとどこか似ている。

哲学者中村雄二郎(1992)が、「臨床における知とは何か」という本の中で、「医療の本質は高度先端医療ではなく在宅訪問医療であり、その方法論は患者を対象化して科学的に検査・診断・治療するのではなく、患者と主観的に共感し合う相互関係である」と指摘していることには、深く考

えさせられるものがある。日本の医療が「患者たち」を地域に返し、日本の福祉が「障害者」や「老人」を地域に返し、日本の学校が「子どもたち」を地域に返して、人々が皆で家庭と地域を中心にした生活を営むことができるようなシステムを、今新たに創り出さねばならない時代になってきたのではないかと、最近私は考えるようになった。

文 献

- Van Den Berg, J. H. (1966) : *The psychology of the sickbed*. Pittsburgh, Duquesne University Press.
早坂泰次郎・上野 轟 (訳) (1975) : 現代社白鳳選書 <11> 病床の心理学 現代社.
- Huizinga, Johan (1919) : *Herfsttij der Middeleeuwen*.
堀越幸一 (訳) (1971) : 中世の秋 中央公論社.
- 柏木哲夫 (1995) : 死を学ぶー最期の日々を輝いてー 有斐閣.
- 中村雄二郎 (1992) : 臨床の知とは何か 岩波新書.
- 竹内徹 (1989) : 乳幼児の母子相互作用ーとくに周産期を中心にしてー 永野重史・依田明(編) 発達心理学への招待 <1> 母と子の出会い 新曜社 pp.18-35.